

## 日本リウマチ看護学会 教育委員会における看護研究支援の実際

佐藤由佳<sup>1)</sup>、平井孝次郎<sup>2)</sup>、井上満代<sup>3)</sup>

1) 名古屋学芸大学 看護学部、2) 川崎市立看護大学 看護学部、3) 兵庫医科大学 看護学部

## 要旨

日本リウマチ看護学会の委員会の一つである教育委員会では、リウマチ・膠原病患者への看護の質の向上を目指した教育的支援を目的として活動している。本邦のリウマチ・膠原病看護に関する研究は、アンケート調査やインタビューにより患者の生活上の困難や看護支援の内容が明らかにされつつある。しかし、研究における倫理的配慮や研究目的に応じた方法の設定などの課題がある。

この度、2025年度の教育委員会の活動として看護研究に関する研修会を開催した。本稿は、看護研究支援の実際として、学会員の看護研究に関する事前のニーズ調査から研修会の内容を検討し、参加後のアンケート結果までを考察したものである。本稿では、研修会での教育活動を振り返り、看護研究支援に関する教育委員会の今後の課題を明確にする。

キーワード：看護研究・日本リウマチ看護学会・教育

## はじめに

看護研究とは、エビデンスに基づく看護の提供に直接的、間接的に影響する既存の知識を検証し、改良し、新しい知識を生成する科学的なプロセスとされている(Gray J. R. & Grive S. K., 2021/黒田、逸見、佐藤, 2023)。看護研究を通して得られた知見を看護実践に活かすことは、看護の質の向上において重要である。しかし、臨床の看護師らは看護研究を進める上で研究に関する基礎知識の不足や時間の確保などに困難を感じていることが報告されており(市川ら, 2021)、大学をはじめとする研究機関と協力・連携して研究をする必要があると考える。

日本リウマチ看護学会の教育委員会は、関節リウマチ・膠原病患者への看護の質の向上を目指した教育的支援を目的として、2022年より活動を開始した。これまで本委員会では、看護研究に関する教育研修会(2022年度、2023年度)と学術集会における委員会企画(2023年度、2025年度)を実施してきた。近年、関節リウマチ・膠原病に関する看護研究では、アンケート調査やインタビューによって患者の生活上の困難や看護支援の内容が明らかにされつつある。

そこで、本委員会ではさらなる看護研究支援を目的とした教育研修会を開催した。本稿の目的は、この度の教育研修会の実践について評価し、今後の課題を明らかにすることである。

## 看護研究に関する学会員のニーズ調査

2025年度の教育研修会を開催するにあたり、2025年10月に学会員に対して看護研究に関する学習ニーズのオンライン調査を実施した。アンケートは2025年10月に学会員全員にメールで配信し、50件の回答を得た。

看護研究に関する研修として希望する内容としては、研究計画書の作成の仕方、文献検索の方法、文献の読み方、抄録の書き方のほか、研究方法に関する具体的な内容についての研修希望も少数見られた。研修会の開催方法については、約8割の回答者がオンラインでの受講を希望していたが、約2割の回答者は対面での受講を希望していた。また、研修会への参加を前向きに検討すると答えた回答者は約7割であった。

研修会への意見の中には、具体的な研究方法に関する内容の要望や、研修会の開催方法として対面またはオンラインとする要望の他、研究の経験が少ない回答者からは、研究を行うことへの不安などもみられた。

これらの学習ニーズをもとに委員会で検討した結果、2025年度の教育研修会は、対面とオンラインによるハイブリッドでの開催をすることにし、教育研修会の内容を検討していくこととなった。

## 看護研究支援の内容の検討

前述のニーズ調査の結果を踏まえ、本研修会の企画にあたり、教育委員会では看護研究支援の内容について検討を行った。具体的には、教育委員会の構成員による複数回の打ち合わせを通して、学会員の学習ニーズに即した研修内容の構成および方法について協議を重ねた。

本研修会では、学会員の中でも特に研究経験の少ない臨床看護師に焦点を当て、看護研究に対する不安や困難感といった心理的障壁を軽減すること、研究過程の理解の促進を目的として内容を検討した。ニーズ調査の結果からは、研究計画書の作成方法や文献検索、文献の読み方、抄録の書き方といった看護研究の各過程に関する基礎的内容への要望が多く示されていた。一方で、研究を行うことへの不安や困難感もみられた。これらの具体的な研究スキルに関するニーズに対応するためには、その前提となる研究過程の理解や研究疑問の明確化が不可欠であると考えられた。

これらを踏まえ、本研修会の内容は、1) 研究過程の可視化、2) 臨床疑問から研究疑問への展開支援、3) 文献検討の基礎的理解の促進、4) 研究方法の基礎的理解の促進の4点を柱として構成した。

## 1) 研究過程の可視化

看護研究における一連のプロセスを段階的かつ視覚的に「研究たんさくMAP」として整理し、それぞれの段階で生じやすい困難を明確化することで、参加者が研究の全体像を俯瞰できるようにすることを意図した。特に、研究の始め方がわからないという初学者の困難に対応するため、研究の進行過程を構造的に理解できることを重視した。ただし、この時点では参加者が研究過程のどの段階に特に困難を抱えているのかを具体的に把握するまでには至っておらず、研修内容は看護研究の全体像を概観できる構成とした。

## 2) 臨床疑問から研究疑問への展開支援

臨床における経験や疑問を出発点とし、それを研究として発展させる思考過程に焦点を当てた。特に、臨床疑問を研究疑問へと発展させる際には、その疑問が生じた背景や関連する看護現象を整理することが重要であると考え、この過程を支援する内容を重視した。これは、臨床現場にお

いて研究疑問の明確化が困難となる要因の一つであると想定されたためである。

### 3) 文献検討の基礎的理解の促進

研究疑問の明確化に不可欠な過程として位置づけ、臨床疑問の背景を既存の知見と関連付けて整理するための基礎的な考え方を扱うこととした。また、単なる知識提供にとどまらず、実際に検索エンジンを用いて文献を検索する演習を取り入れ、参加者が手を動かしながら文献検索を体験できるようにした。これにより、文献検索に対する理解と実践的スキルの習得を促す仕組みとした。

### 4) 研究方法の基礎的理解の促進

研究目的に応じて適切な方法を選択する必要があることから、代表的な研究デザインとして「どのようなものか」を明らかにする研究、「関連を検討する研究」「因果関係を検討する研究」の三つの枠組みを提示し、それぞれの特徴と適用の考え方について基礎的理解を促す内容とした。

また、これらの内容を検討するにあたり、研究に対する心理的障壁の軽減を図る観点から、研究過程を一連の探索として捉え、段階的に進めていくことができる構成とした。すなわち、研究を特別な作業としてではなく、臨床実践の延長線上にある試行錯誤のプロセスとして位置づけることで、参加者が主体的かつ前向きに取り組めるようにした。さらに、研修方法としては、講義による知識提供に加え、参加者が自身の臨床経験をもとに思考を深めることができるよう、ディスカッションやワークを取り入れる方針とした。これにより、参加者の能動的な学習を促進し、研修内容の理解を深めるとともに、研修後の看護研究活動へとつながる基盤づくりを目指した。加えて、研修会の開催形式については、ニーズ調査の結果を踏まえ、対面とオンラインを併用したハイブリッド形式を採用することとした。これにより、多様な背景を持つ学会員に対して学習機会を提供することを可能とした。

以上のように、本研修会の看護研究支援の内容は、事前のニーズ調査に基づき、研究過程の構造的な理解と心理的障壁の軽減を両立するとともに、研修後の継続的な看護研究活動につながることを意図して検討された。

## 研修会の実際

本研修会における実践の概要について、以下に報告する。

### 1) 事前準備

前述の通り、今回の研修では、参加者が実際に施設で看護研究に取り組めるよう、研究計画書の作成を中心とした講義を実施した。そのため、参加者が日頃臨床で抱えている疑問を研究疑問へと発展させる過程を検討できるよう、事前に臨床疑問の記述を求めた。

また、参加者が研修を通して研究の進め方を理解できるよう、研究活動を地図に見立てた「研究たんさくMAP」を作成した。本MAPは、研究の全体像と各段階の関連性を視覚的に捉えられるように工夫したものであり、参加者が自身の臨床疑問を段階的に整理するために活用した。さらに、研究計画書の作成に必要な段階を「1. クリニカルクエスト」「2. 動機となる看護の現象」「3. リサーチクエスト」「4. 研究目的と意義」「5. 研究の方法」と5つに整理し、ディスカッションやワークを取り入れた研修構成となるよう資料を作成した。

### 2) 研修会当日

研修会は、名古屋学芸大学名城前医療キャンパスの教室を会場として実施した。参加者は対面3名、オンライン2名の計5名であり、講師は学会員である看護系大学教員3名が担当した。対面とオンラインを併用したハイブリッド形式で実施した。

本研修では、事前に作成した研究たんさくMAPを用い、参加者が自身の臨床疑問を起点として研究計画書作成につながるプロセスを段階的に検討する構成で進行した。事前に記述された臨床疑問をもとに、各段階の検討を行った。まず、臨床疑問を確認したうえで、その背景にある看護の現象を整理し、リサーチクエストへと発展させた。さらに、研究の目的と意義を明確にし、研究方法へとつながる一連の流れについて、講義とワークを組み合わせて進行した。「2. 動機となる看護の現象」および「3. リサーチクエスト」を検討する場面では、パソコンを用いて医中誌Webによる文献検索を実施した。シソーラス用語やキーワードの検討から検索結果の確認までを講師とともに、文献検索の過程を体験する形式とした。オンライン参加者の中で環境上文献検索の実施が難しい場合には、研究に関する疑問について講師が個別に対応した。また、研修中は参加者が自身のクリニカルクエストについて検討し、共有しながら議論を行った。その過程においては、講師が参加者のクリニカルクエストを聞き取りながら内容を整理し、リサーチクエストへとつながる支援を行った。参加者は事前に準備したクリニカルクエストをもとに内容を共有し、講師への質問を行いながら、リサーチクエストへの発展について主体的に検討していた。

## 評価

本研修の学習効果を短期的評価と長期的な評価の視点で考察し、本研修の目的である教育委員会の今後の活動を明確にする。

### 1) 短期的評価

対象者の学習を評価する際には、さまざまな評価方法を使い分けることが効果的であるとされている(Bloom, B. S., et al, 1971)。本研修の企画と運営、次回の研修会への示唆のための短期的評価として、次の3つの評価の実際を考察する。

#### (1) 診断的評価

診断的評価は、教育活動を実施する前に実施し、参加者の学習の準備状態を把握するために有効である。この評価により、参加者の学習の準備状態に応じた教育活動の設定が可能となる。

本研修会では、前述したように事前に参加者の看護研究に関する学習ニーズの調査を実施し、看護研究に関する参加者の学習の準備状態の把握に努めた。この診断的評価により参加者の学習状況に応じた研修内容の設定が可能となったため適切であったと考える。しかし、実際の研修では『研究計画書の立て方が知りたい』という参加者の学習ニーズの要素となる「研究疑問の明確化」において、かなりの時間を要した。その改善としては、次回の研修会における診断的評価として、参加者の学習の準備状態を具体的に行動レベルで把握しておく必要があると考えられる。看護研究は取り組むべき過程が明確であり、どの過程で参加者の困難が生じているのかを事前に明確に診断していくことが必要であるため今後の課題とする。

#### (2) 形成的評価

形成的評価は、教育活動の最中や途中に実施し、その教育活動が目指す成果が得られているかを把握するために有効とされている。研修等においては参加者の当日の反応を評価することや、複数回実施される教育活動の途中で参加者の反応を評価することが形成的評価となる。この形成的評価によって、これからの教育活動の改善も可能となる。

本研修では、参加者のニーズに応じた研修内容（教育活動）を事前に用意していたが、参加者の反応から自らの臨床疑問が何故生じたのかを考えることが難しいと感じていることが分かり、研究疑問の明確化を妨げている原因の一つになっていることが理解できた。この研究疑問の明確化においては、文献検討が必須であるため、検索エンジンを使用した文献検討のスキルを向上することが短期的評価として特記すべき事項である。検索エンジンを使用するためには、物理的環境や人的環境の調整も必要であり、教育研究機関に所属する学会員との協働などの推進も重要であることが推察された。また、臨床疑問が研究疑問に発展するプロセスに研究対象者への倫理的配慮に関する認識や配慮の具体的な方法を習得することも重要となるため、今後の教育活動に反映することが必要となる。これらの形成的評価は、次回の研修会までの教育活動の途中評価としても位置付けられている。今後は、先の診断的評価の課題を踏まえて、次の研修会の内容を企画すること、さらには、最終的な総括的評価に向けた取り組みを形成することが課題である。

### (3) 総括的評価

総括的評価は、一定の教育活動を終了した際に実施し、教育活動全体を把握するためのものである。

本稿では、総括的評価を本研修の課題を見いだすための短期的評価として位置付け、本研修会後に実施した参加者へのオンラインアンケート結果から考察する。参加者 5 名全員からアンケートへの回答が得られた。参加者の回答からは研修内容に満足していることが判断でき、「難しく感じていた看護研究にどのように取り組んでよいのかを理解でき前向きな気持ちになった」という意見が多くあった。このような結果から本研修の全容は参加者のニーズを満たすものであり、期待される学習を到達するものであったと評価できる。しかし、「時間が足りなかった」という意見もあり、診断的評価と形成的評価から得た反省点を踏まえて本研修の目的を評価すると課題が残るものであった。今後は、リウマチ・膠原病の看護研究における学会員への教育活動の最終目標となる学会員にとっての学習目標を設定することが重要課題である。

## 2) 長期的評価

研修等の参加者の長期的な学習効果を捉えるには、カークパトリックの 4 段階評価法が効果的であるとされている (Kirkpatrick, D. L., et al, 2005)。この評価法は、研修等の参加者の行動を時間の経過に合わせて適切な評価を示すことで、参加者の長期的な学習を評価することを目的としている。教育委員会の今後の活動への示唆を得るために、本研修を教育活動と捉え、以下この 4 段階の評価法に基づいて考察する。

### (1) 反応レベル

教育活動の内容に対して参加者が満足したかを教育活動の直後に評価する。

本研修中の参加者は自発的に質問をされ、課題のワークに取り組みれていたことから非常に積極的に講義を聴講されていた。研修会後で回答いただいたアンケート結果が

らも本研修に満足されたことが判断できた。この満足感は今後の看護研究への取り組みへの動機付けとなっていることが推察できるが、看護研究活動への内発的動機付けとして定着するためには今後の継続的な支援が必要であると考ええる。参加者の研修会における反応は前述した研修会前に実施する診断的評価と密に関連しており、参加者の肯定的な反応が得られるためには、参加者の学習の準備状態に応じた研修内容であることが前提となる。本研修では、事前に参加費を払い能動的に参加した方が対象であったため、肯定的な反応が得られやすい対象であった。そのため、自発的な質問を含めた積極的な参加者の反応が得られたと考えることが妥当である。

### (2) 学習レベル

教育活動の内容に対して参加者が理解したかを教育活動直後に評価する。

本研修の内容は診断的評価から考案したものであったが、臨床疑問の背景を考えることに時間を要し、この原因については前述した形成的評価と同様の考察となる。臨床疑問を研究疑問に繋げるためには文献検討をはじめとし、研究目的に応じた研修方法を設定し、対象者への倫理的配慮をどのように確保するのか等、多岐にわたる研究計画を立案しなければならぬ。本研修はその全容を紹介する概論としての位置付けであり、研究内容の理解は得られたと考えられる。今後は研究計画の各段階で何が必要となるのかを具体的に理解できるように研修内容を設定することが必要であると考えられた。

### (3) 行動変容レベル

教育活動の内容を参加者が活用できたかを教育活動の 3 ヶ月から 6 ヶ月後を目安に評価するもので、参加者が所属する組織が評価する。

本研修会の 3 ヶ月後には、母体である日本リウマチ看護学会の第 7 回学術集会在開催される。ここで本研修会の参加者にその後の看護研究活動を聴取することで、本研修の長期的な評価としたいと考えている。期待する行動変容としては、文献検討を実施していることや、本研修会での学びを組織で共有していることである。

### (4) 成果レベル

教育活動の内容は参加者の組織の業績に貢献したかを参加者が所属する組織が評価する。

本研修での学習が参加者の所属する組織の業績となるには継続した支援が必要である。この支援については、前述した総括的評価に必要な教育委員会の教育活動の最終目標となる学会委員の最終的な学習目標を設定することが不可欠であり、今後の課題としたい。

## おわりに

本稿は、日本リウマチ看護学会の委員会の一つである教育委員会が 2025 年度に開催した「看護研究を始めてみよう～臨床疑問から研究疑問にするために～」における実践を報告したものである。

本稿の目的である学会員への看護研究支援に関する教育委員会における今後の課題は次の 3 つが明らかとなった。1. 看護研究の各過程でどのような困難を抱えているかを事前に明確にすること、2. リウマチ・膠原病の文献検索のスキルを向上し、研究課題を明確にするための取り組み、3. 研究倫理を踏まえたリウマチ・膠原病看護の研究手法の習得への支援であった。

本稿を読んでくださった方がリウマチ・膠原病患者の看護研究に関する学習の機会となることを期待し、教育委員会のさらなる活動に努めていきたい。

## 謝辞

本研修会は、日本リウマチ看護学会会員の皆様からの学会費により開催が可能となったものであり、学会員の皆様に心から感謝申し上げます。

## 利益相反

開示すべき利益相反はない。

## 引用文献

- ・ Bloom, B. S., Madaus, G. F., Hastings, J. T. (1971):  
Handbook on Formative and Summative Evaluation of  
Student Learning. New York: McGraw-Hill.
- ・ Gray J. R. & Grove S. K. (2021) / 黒田裕子, 逸見功, 佐藤富美子 (2023): *バーンズ&グローブ 看護研究入門* 原著第9版,2, エルゼビア・ジャパン, 東京.
- ・ 市川光代, 白木沙知 (2023) : 臨床看護師が看護研究を  
負担に感じる要因－看護研究支援に向けた文献研究からの  
示唆－. 三育学院大学紀要, 13(1):53-61.
- ・ Kirkpatrick, D. L., & Kirkpatrick, J. D. (2005):  
Implementing the Four Levels. San Francisco.  
Berrett-Koehle.